

タンザニアの象徴、  
アフリカの最高峰  
キリマンジャロは  
標高5895m。

 コーヒー産地  
の香り11

# タンザニア連合共和国

The United Republic of Tanzania

我が国で消費されるコーヒーのほぼ100%は海外から輸入されています。

したがって、私たち日本人は日々コーヒーに親しんでいるながら、農産物としてのコーヒーに接することは全くない訳です。

コーヒーとはどのような国々で、またどんな場所か、どのように、どのような人々によって生産されているのでしょうか？

本誌では、代表的なコーヒーの生産地について、毎号特集を組み紹介しています。

今回はアフリカに渡り、タンザニア連合共和国を紹介します。

タンザニアといえば、何とんでもアフリカの最高峰・キリマンジャロとそのすそ野に広がる大サバンナ地帯。

およそ1万5千平方キロメートルにも及ぶ自然保護地区、セレンゲティ国立公園は、野生動物の宝庫として広く世界中に知られています。

そして、キリマンジャロの麓で栽培されるコーヒー「キリマンジャロ」は高品質「コーヒー」として、日本を初め世界中の消費国で古くから珍重され続けてきました。

現在我が国のタンザニア・コーヒーの輸入量は、年間約1万トン。

人気の高いタンザニアのコーヒーの現状を紹介しましょう。

文責：コーヒーブレイク編集部 川崎邦治  
写真提供：三上綱子

## タンザニアという国…

タンザニアという国の生い立ちは、大変複雑です。

まず下の地図を見てみましょう。

タンザニアの国土面積は94万5千平方キロメートルと広大で、東アフリカ最大の国です。

東アフリカ北部から、エチオピアのアビシニア高原、ケニア高原と続き、タンザニアの国土もキリマンジャロに象徴されるようにその殆どを山岳地帯と広大な高地サバンナが占めています。

一方インド洋側には1400キロ以上にも及ぶ高温多湿の海岸線が続き、ザンジバル諸島を抱えています。北部の国境にはナイルの源流、アフリカ最大の湖、ビクトリア湖、その向こう側はナイル文化圏です。

西側は大地溝帯によって生まれた古代湖タンガニカ湖の沿岸に接しています。もちろんこのように変化に富み、かつ広大な地域が古くから一つの国にまとめられていた訳ではありません。

現在でもタンザニアは126種類もの部族が暮らす連合共和国で、その歴史を紐解くとさらに複雑な経緯が伺えます。

もともとタンザニアは人類発祥の地と言われています。

北部からは175万年前の人類の祖先（ジンジャントロプス）の化石が発見されており、さらに360万年前のヒトの足跡が発見されているからです。

ですから、タンザニアの地には最も太古から人類が暮らしていたということになります。

高原や山岳、海岸そして湖岸に個別に様々な部族がそれぞれの文化を育んでいたと考えられます。

ところが、紀元前と紀元を挟んだ数百年の間に急激に部族間の交流が進みます。

紀元前三世紀頃、西アフリカや中央アフリカから大量に移住してきたバンツィ系部族は、原住部族を同化吸収し、マサイ族に代表されるナイル・サハラ系部族たちも紀元一世紀頃にはタンザニアに定住しはじめます。

さらに同時期、既に海岸地域にはアラブ人貿易商達が到達しており六世紀から七世紀頃には内陸高地への通商ルートも確立されていました。

このためアラブ色の強いスワヒリ文化やスワヒリ語が広く浸透し、部族間の接触もますます頻繁になっていくのです。

このようにタンザニアは、東アフリカ内陸部での部族間交流の要所となっただけでなく、貿易路として有利な海岸地域で



はアフリカ外からの干渉をますます強く受けるようになります。

紀元一〇世紀以降は、中国やペルシャとの交易が活性化し、一五世紀にはインドとの交易も行われるようになります。

当初取引されていたのは主に象牙でしたが、中世になると丁子や砂糖のプランテーションも開拓され、さらに海外への奴隷の取引も行われるようになります。

交易とはいっても、当時の利権はほぼ

外来の貿易商が握っていましたので、現地の人々はあくまでも搾取される側だったようです。

タンザニアの一部では、ヨーロッパの数世紀前から鋼鉄の鑄造技術が生まれており、もともと高度な文明が存在していましたが、この長い間の海外からの干渉によって抑止され封じ込められてしまいました。

一六世紀にはポルトガル人が定住しは



キリマンジャロコーヒーの主産地アルーシャのコーヒー農園。

じめ、一七世紀にはオマーン人がそれに取って代わります。

一八世紀にはタンザニアの象牙は遠く日本にも運ばれていました。

一九世紀にはヨーロッパ列強国によるアフリカ領土の奪い合いが過熱し、原住部族たちの抵抗もむなしく、内陸部はドイツに支配され、その後、海岸地域は英国の領土とされてしまいます。

第一次世界大戦後は英国が支配することとなります。

さらに紆余曲折を経て、大陸側は1961年タンガニカとして独立し、ザンジバルは1963年に独立を果たします。

そして1964年両国は統合され、現在のタンザニアが誕生するのです。

タンザニアは、世界で最も古い歴史を持ちながら、建国は僅か半世紀未満の新しい国でもあるのです。

### キリマンジャロは タンザニアコーヒーの母

コーヒーノキの源流は、アフリカ東北部の高地・アビシニア高原でした。

では、タンザニアにコーヒーが持ち込まれたのは、一体いつ頃のことだったのでしょうか。

初めてタンザニアでコーヒーが栽培され

キリマンジャロの麓、もう一つの産地モン。



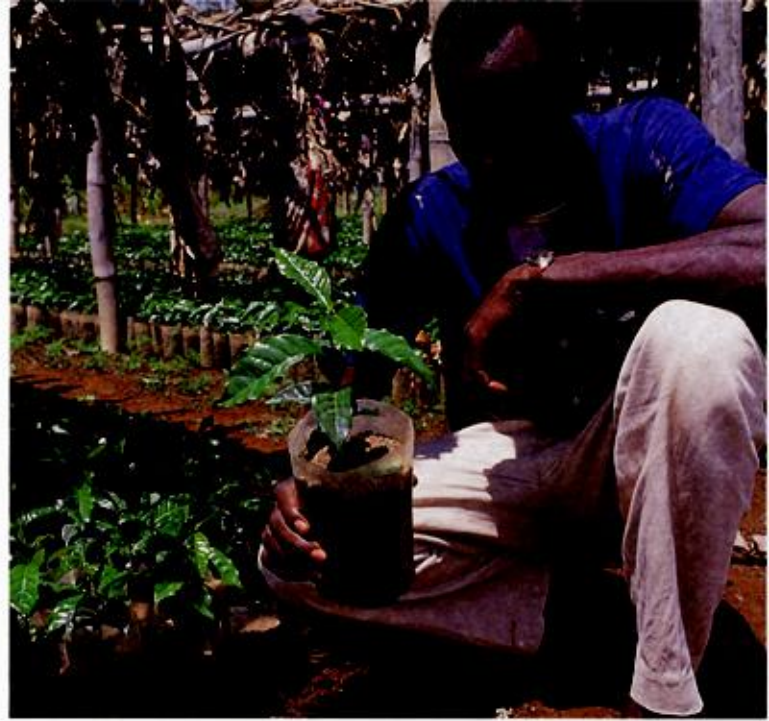
たという記録は今からおおよそ300年以上前のことです。

ビクトリア湖の西側、ブコバ地方にウガンダの部族ブニロ族がコンゴに自生するコーヒーの種子を持ち込んだのが始まりだといわれています。

コンゴの自生種はロプスタ種で、この当時は一部の部族の間だけでコーヒーが栽培され、食料、飲料あるいは薬剤として摂取されていたものと考えられます。

本格的に飲料としてのコーヒーが栽培されたのは、ケニヤと同じく第一次世界大戦前後のことのようです。

ヨーロッパの列強諸国が第二次世界アフリカに領土合戦を繰り広げている間に、世界のコーヒー需要は飛躍的に伸び続けました。



苗床で育てられるコーヒーの苗は丁寧に管理される。



2月に入ると、キリマンジャロの裾野にはコーヒーの花が一面に咲き誇り、ジャスミンのような甘い香りが漂う。

## タンザニアコーヒーの近代

然の成り行きだったと言えます。最初に北部高地でのコーヒー栽培を行ったのはギリシヤ人だったと言われています。

そこはキリマンジャロの麓、標高1500メートルの緩やかな斜面でした。

肥沃な火山性の土壌と適度な雨量、そして高地ならではの温度変化が見事なコーヒーの実を結実させました。

キリマンジャロの麓がコーヒーの栽培に最適であることが立証されたのです。

特に、第一次世界大戦が終結し、英国がタンザニアの宗主国となると、北部の高地には次々とコーヒーのプランテーションが開拓され始めます。

1914年頃には、キリマンジャロ山域には100を越えるプランテーションが開拓され、200万本ものコーヒーの木が栽培されるまでに至りました。

当初こうしたタンザニアのコーヒーは、まだブランド価値がありませんでした。酸味と香りの強さから、一旦イメェンに運ばれた後、「モカ」のブランド名でヨーロッパに運ばれていたこともあったようです。

しかし、その品質の高さから「キリマンジャロ」が高品質コーヒーの一ブランドとして認知されるにはまだまだもう少し時間が必要でした。

原産地のエチオピアを除くアフリカのコーヒー産地は、一九世紀後半以降拡大する世界のコーヒー需要を受けて新たに開拓された産地ばかりでした。

コンゴで低地栽培や病虫害に強い新種ロブスタ種(カネフォラ種)が発見されて以来、まず中央アフリカや西アフリカに、さらに東アフリカへと生産地が広がっていきます。

一方二〇世紀初頭、消費各国ではコーヒーのパッケージ製品化に伴い、安定した品質と供給量を確保するため、にわかにブレンド技術が高まります。

アフリカ各地に開拓された新生産地では、高品質コーヒーではなく、病虫害に強く安定的な輸出量を確保できるロブスタ種のコーヒーの栽培が主流となりました。大量商品化のためのブレンドに使用するためです。

つまりアフリカの新生産地に求められたのは、質ではなく量だったのです。

タンザニア(当時はタンガニカ)やケニヤなどの東アフリカでも、当時の主流はロブスタ種で、キリマンジャロなど高地栽培のアラビカ種はまだ発展の過程にあり、決して主流ではなかったようです。1920年代に出版された「オールア

特にアメリカでは消費の近代化が進み、大量生産、大量焙煎、大量販売の波によって、原料は著しく不足しはじめていたのです。

世界的な規模で新たな産地の開拓が求められていました。

ドイツ占領下の一九世紀終盤には、奴隷制度は廃止されており、当初労働力を集めやすい低地にプランテーションが開かれましたが、雨が多い地域での栽培は難航を極めました。

高品質のアラビカ種は、東アフリカ北部のエチオピアを発祥としています。

アラビカコーヒーを育てた東アフリカの高地は、エチオピアのアビシニア高原に始まり、その南のケニヤ高地、さらに南下してタンザニア北部高地へと続いているのです。

試行錯誤の末、当時新たなコーヒーの生産地に、アビシニア高原と同等の気候条件を持つケニヤ高地やタンザニア北部高地が候補地として挙げられたのは当



キリマンジャロコーヒーの加工は水洗式が主流である。



アルーシャ、ハンドピッキングによる収穫風景。

「バウトコーヒー」に記された当時のタンガニカカの生産地の紹介文にはこう書かれています。

「タンガニカカ地域の農産物の中でコーヒーは上位にある。最も重要なコーヒー産地はビクトリア湖西のプロバ地方である。キリマンジャロ山周辺の北東地方でもコーヒーは栽培されている。ただしこの地域は上壤と降雨がコーヒーにあまり適していない。」

また別の項ではこう書かれています。  
「イギリス領東アフリカ産のコーヒーは近年、著しく重要になっている。このコーヒーを産するのはケニア、タンガニカ、ウガンダ、北ローデシア、ニアサランドである。…(中略)…タンガニカ・アラビカはキリマンジャロ山に生育し、秀でた品質である。ロブスタ葉増量用に使われる。…」  
この時期によく高く高地栽培のアラビカ種が重要視され始めたようで、情報の錯綜がうかがわれます。

また、当時のアフリカの新生産地には共通の問題がありました。  
奴隷時代から続いた現地労働者の労働環境です。

もともと外来の経営者が開いた大型のプランテーションが主流でしたので、その利権はどこも宗主国の外国人が握り、多くの現地の労働者の生活がないがしろ

にされ続けていたのです。

1960年代に入り、独立・統合を果たしたタンザニアのコーヒー産地には、現地の農民達による小規模な個人農園が広がり、生産者たちの共同体も整備され始めます。

特にキリマンジャロ周辺のモシヤアルーシャ地方では、現地の人々の手によって高品質コーヒーの栽培や加工が定着し始め、ほどなくキリマンジャロコーヒーは、世界的な高品質ブランドとして認知されるに至るのです。

### 今、タンザニアコーヒーは…

現在、タンザニアの年間コーヒー生産量はおよそ75万袋(1袋=60kg、06/07年度ICO統計資料)で、そのうち60%が北部のキリマンジャロ付近で栽培されるアラビカ種です。

標高1500mから2500mの緩やかな斜面で栽培されるブルボンタイプの良質な豆です。

世界のコーヒー消費量からすれば、僅か1%程度の輸出量ですが、強い酸味と甘い香りを持つキリマンジャロコーヒーはその高い品質で、世界中に根強いファンを増やしてきたまさにグルメコーヒーの代表選手といえます。



これは、古領時代からの栽培技術の継承という面も決して否めません。

苗床の管理から栽培農園の環境保全、さらに丁寧なハンドピックによる摘み取り、水洗加工設備の整備、手間をかけた選別など、恵まれた風土以上に継承された栽培加工の技術力が品質を支えているのです。

生産者の組合組織も重要です。

特に独立以降増え続けた小規模農園を協同組合に組織し、それまでの大農園プランテーションと比べても、劣らない品質を維持すること、また生産者が搾取されることのない正当な価格で取引されるよう生産者と生産者を守っていかなくてはならないからです。

そういう意味では、他のアフリカなどの生産地と同様に、タンザニアも未だ過渡期にあると言っていいでしょう。

### タンザニアコーヒーの今後……

2005年以降、東アフリカの各コーヒー生産地の産出量は減少し続けています。

これは、アフリカ東部を襲った干ばつの影響によるものです。

タンザニアでは、特にロブスタ種の中心産地、西部ビクトリア湖岸側のプロバ



地方に病害が広まっており、既に産地の40%もの農園が被害を受け、本年度の生産には暗雲が立ちこめています。

タンザニアコーヒー研究所(TCRR)では、古いアラビカ樹の植え替えを推進すると同時に、生産性が高く病害に強い品種を作るために、遺伝子組替え技術も取り入れ、開発を進めています。

この新種の苗は古木と入れ替えるために農家に配給される予定で、政府所管の機関タンザニアコーヒーボード(TCB)では2010年までに総生産量を現在の倍以上の200万袋まで引き上げることとを計画しているようです。



野生の動物たちが闊歩する世界最大の自然公園セレンゲティ国立公園に象徴されるように、タンザニアは広大かつ緩やかな高地を有する国です。

産地の広がりという意味ではまだまだ多くの可能性を残した有望な生産地であると言えることが出来ます。

特に、品質の高いキリマンジャロコーヒーは、世界のグルメコーヒー市場やスペイン、イタリア市場でさらなる飛躍を遂げる可能性がうかがえます。

今後の経緯の中で、高品位のコーヒー生産がタンザニアの経済を左右することは間違いないようです。